

## わが家のある日

夕方、部活動が終わってたくたくたに疲れて帰ったら、弟の茂樹が台所のそばにじっと立っていた。その顔を見るとなんだか余計にいらいらして、ドスンとかばんを玄関に置いたまま座りこんで、つい言ってしまった。

「あーあ、疲れた。あんたはいいよね、小学生で…。」

茂樹は聞こえなかったのか、台所で晚ご飯の支度をしているお母さんを見ながら、話しかけてきた。

「お姉ちゃん、一緒に晚ご飯の準備を手伝おうよ。お母さん、さつき仕事からあわてて帰ってきたんだよ。」

「私は部活でたくたくたなの。じゃあ、まだご飯まで時間かかるなあ。おなかすいたなあ。」

私は思わず言ってしまった。それから、戸棚からお菓子を探してポリポリ食べ始めた。それを見て、お母さんが、

「明美、ご飯前よ。やめておきなさい。」

仕事に疲れているのか、いらいらした感じの声だった。

「うーん、わかってる。」

とは言ったけれど、食べたしたら止まらない。それにお母さんの言い方にかちんと来て、お菓子を口に入れる手がより速くなった。しばらくしてお母さんの声が聞こえた。



「ご飯できたわよ。食べましょう。」

「お父さんを待っているよ。」

と茂樹が言った。

「お父さんは仕事で遅くなるのよ。塾があるんでしょ？遅れるから早く食べなさい。」

お母さんに言われて、茂樹は黙って食卓についた。けれど、私はおなかがいっぱい。

「今、おなかすいてないよ。塾から帰ってから食べる。」

「だから、ご飯の前にお菓子は食べないように言ったでしょう。」

お母さんの機嫌も悪くなってきた。私はテレビのスイッチを入れて、知らん顔を決めこんだ。お母さんと茂樹はご飯を食べていたけれど、二人とも黙々と食べている。茂樹がぼつりと、

「お父さん、遅いな。この前の日曜日のサッカーの試合にも来るって言うてたくせに、結局仕事だって言うて来てくれなかった。」

「仕方ないでしょ。仕事なんだから。」

とお母さんが言った。

「ただいま。」

お父さんが疲れた様子で帰ってきた。

「お帰り、お父さん。子どもたちの塾がある日だから、先に食べはじめましたよ。」

とお母さんが言った。

「ああ、ごめん。ちよつと本屋に寄っていたんだ。」

「残業じゃなかったの？」

険悪な空気になりそうだったので、時間前だったけど、私は茂樹をさそって塾に行った。

そんなある日のこと。部活動が休みの日曜日だった。朝はゆっくり起きて、友だちと遊ぼうと思っていたのに、前の日の夜にお父さんが、「明日は明美も部活動が休みらしいから、みんなで出かけるぞ。」と言った。茂樹は喜んでいい。私はあんまり行く気はしなかったけれど、いやだとは言えずにいた。

朝から、お母さんは、

「ほんとはたまっている家事もしたいけど。」

と言いながら、でも楽しそうに、私たちの好きなものをいっぱい入れたお弁当を作っていた。昼前に、近くの県立公園に家族そろって出かけた。茂樹はさっそくアスレチック遊具の所に走って行った。私はそんな元気もなく、ぶらぶらと歩いた。するとお父さんが、「行こう。」

と言って、私の手を引っぱった。

「わかったから…。」

私は、お父さんの手をふり払って、しぶしぶ後をついて行った。そして茂樹が遊んでいる遊具で一緒に遊んだ。そのうち追いかけてこなかった。ただの追いかけてこなのになに楽しかった。夢中になって三人で走り回った。

「まいったな、もう歳だ。」

お父さんが苦笑いしながら言うとお母さんも笑顔で言った。

「おなかすいたでしょう。そろそろ食べましょうよ。」

持ってきたお弁当を広げて、四人で食べながら話をした。茂樹は学校であった出来事をおもしろおかしくしゃべっている。私も負けずいろいろなことを話した。お父さんとお母さんは、聞きながらうなずいたり笑ったりしている。友だちとの悩みごととも相談できた。ちよつと

耳の痛い話もされたけど、不思議と素直に聞いた。

「茂樹、この前の日曜日、約束してたのに、サッカーの試合を観に行けずにごめんな。観に行こうと思って、土曜日に仕事を一生懸命がんばったんだけど、終わらなかつた。それと、仕事でうまくいかないときに、帰りに気分転換に本屋に寄ったりしてしまいうこともあって、帰りが遅い時もあったな。帰れる時は、できるだけ早く帰るようにするからな。」

「私、最近部活でレギュラーはずれたんだ。いらいらして、ついみんなに八つ当たりしてたかもしれない。」

私もふとそんな話をしてしまった。

「そうなの…。明美もいろいろあるんだね。」

どうせ反抗期のせいだと思ってしまつて、ち

ゃんと話を聞けてなかつたね。」

お母さんがつぶやくと、続けて茂樹が言った。

「ぼくは、毎日こうやってみんなでご飯が食べたいな。」

「そうよね。でも、難しいわね。お父さんもお母さんも仕事があるし、あなたたちも部活や塾で忙しいしね。」

次の日の朝、早く家を出たお父さんから、食卓の上に小さなメモが置いてあった。

「明美、茂樹、おはよう。今日もけがをせず、がんばろう。」

茂樹は、とっても喜んでいた。

私は、父にメールを打った。

